

13期生と18期生の谷間の低迷期

第16期 清水 裕

我々が千歳高校の門をくぐったのは、昭和32年の春だった。中学生のころからラグビーには関心があったので、新学期早々伊東を誘って早速入部した。前年には13期生を中心とした強力チームを構成し、全国大会予選では決勝まで進んだと言う話を聞いた。その時は、2年生と3年生だけで15人そろっていて1年生などは、当分試合などには出られないだろうと思った。

しかし入部してまもなく雰囲気が変わってきた。3年生の退部問題がおき、さらに翌年にも同じような問題が起った。

高校の予備校化の波のなかで、我がラグビー部の活動もその波に翻弄されたのではないか。

ラグビー部に限らず部活をしている者の殆どは、3年生になると間もなく部活から離れていった。その理由が受験勉強のためという事であった。

当時多くの高校で予備校化の傾向が強く、特に都立高校では顕著であったが、千歳高校では自由な校風が強く残り、一部受験勉強に熱心なものもいたが、予備校化とはほとんど無縁であった。しかし、大きなうねりのなかで千歳高校のみがその波を避けるわけにはいかなかったのだろう。時に部員不足に悩み、グランド使用に学校側の規制が入る等、やりづらい時期ではあった。

我々16期生1年生の時も、2年生の時も合宿がなかった。その様な訳で3年生の時も是非やりたかった。合宿の準備には10期生のOB故・菅井啓之さんの強力なバックアップのもとに進められた。遠方での合宿が不可能なときは、柔道場を合宿所とし練習は学校のグランドを使うことを考えていた。しかし、参加部員数が15名以上であることが絶対の条件であった。15人揃わな

ければ菅井さんはもとより他のOBからも問題にもされなかった。懸命に努力をしたが、最終的に13名迄しか集められなかった。合宿の話は学校側に承認を求めるまでにも進まず終わった。

そんなこんなで結局我々16期生は3年間合宿を経験せずに終わった。合宿の辛さを味あわなかったのは幸いかも知れないが、その辛さを乗り切った感激も体験できないままの3年間であった。多くの上級生や先輩から聞かされる合宿の体験談から、その恐ろしさ(?)の怯えつつも、強くなるための必要性や、その事による自信の獲得のことを考えると、むしろ我々は積極的であっただけに何とも残念であった。

若いころの激しいトレーニングによる身体的鍛練は、肉体的自信ばかりでなく精神的な自信をも付けさせる。社会に出てからの辛さは、肉体的なものより精神的なものの方が多く、その事を考えると千歳高校ラグビー部での3年間は貴重な経験ではなからうか。

その夏の練習は、学校のグランドを使用することが出来なかった。前年あたりより行われていたグランド整備が完成せず、この夏休みを利用して整備のし直しをする事になっていた。

しかし、前述のOB故菅井さんの厚意で第一生命のグランドを使用することが出来た。練習前のウォームアップがわりのランニングにはちょうど良い距離のところであった。グランドに着くとすぐ準備体操を始め、そのあとスパイクに履きかえた。

夏合宿がわりの練習だということもあって、練習初日には13期生が大拳して押しかけ(?)大いに絞られ、合宿の辛さの一端を味あわされた。しかし、合宿の辛さか

らすれば、たいしたものではないだろうと思うと、妙な歯がゆさを覚えた。

いつもの年だと夏の練習は、せいぜい1週間程度だったがこの年は2週間みっちりやった。またこの年に限って雨が降って練習が休みになった事が一日もなかった。

春休みにしろ、夏休みにしろ休暇期間中の練習には、出てこない者が必ず何人かはいたが、この年には部員全員がそろっていて、それなりの充実した練習ができた。

当時の公式戦としては、春の憲法大会、夏の国体予選、秋の全国大会予選とがあった。憲法大会と国体予選の記憶は全く無いが、全国大会予選は一回戦で負けたのにも拘わらず、結構覚えている。

負け惜しみでなく、勝てた試合だったし、3年生にしてみれば高校生活最後の試合でもあるからであろう。

試合全体では、常に押し気味で推移していた、ボールの獲得率も6対4から7対3ぐらいだったと思う、フォワードの縦への攻撃も結構強力であり、バックスのライン攻撃も当を得たものであった。今考えると、フォワードにしろ、バックスにしろその攻撃があまりにもまともすぎて、トライに結びつかなかったのだろう。相手のディフェンスが良いのならともかく、そんなに強力とは思えないディフェンスにも拘わらずトライが出来ず、試合中にもなにかイライラしていたことを思い出す。

我々の唯一のトライも、フォワードの縦の攻撃からゴール前の混戦になり、転がったボールを拾い一気に突っ込みゴールラインを越えたのが、1年生の金井であった。

位置も絶好で、ゴールポストのすぐ近くだった。その後の伊東のゴールキックがほんのわずか、まさにほん

のわずかずれた。即ち、ボールがクロスバーに当たり弾かれたのだ。

しかし、特に残念とも思わなかった。何故ならそのときの試合運びから、すぐにその程度の失敗は取り戻せると思っていた。

でも結局は、後半に許した唯一のトライにゴールを決められ、惜敗した。力を出し切れなかった気持ちが強く、スッキリしない思いが残った。

これからは私の個人的な経験だが、後半を10分過ぎたころだった。相手陣は10ヤードラインを少し入ったところでペナルティーキックを得た、キッカーは私だった。

ポイントが結構真ん中近くだったので、ほぼ正面に蹴った、味方プレーヤーを先に行かせるべくゆっくり走りだした、その当時のルールでは、ペナルティーキック後のボールをそのキッカーが最初に触れることは禁止されていた。ところがそのボールを相手フォワードがエラーした。しめたと思った。一気にスピード上げた。10ヤードライン内側から蹴ったボール、当然25ヤードラインこえていた、足に引っかけて持ってゆけばトライ間違いなしと思った。ゴールラインとボールのあいだには誰もいない位置に転がった。それを見て一瞬拾って持っていくことが閃いた。それがいけなかった。その一瞬の閃きがドリブルのエラーをさせた。

相手エラーも、私が足で持ってゆけばアドバンテージでトライになっていただろうに、結局はノックオンでスクラムとなった。

○全国大会予選
10月 成蹊大学グラウンド
千歳3-5大泉

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
金	高	鶴	青	清	三	平	湯	大	伊	伊	黒	竹	川	
井	梨	森	?	木	水	国	井	沢	久	保	藤	東	田	内
井	梨	森		木	水	国	井	沢	久	保	藤	東	田	内
18	18	17	18	16	16	18	18	18	16	18	16	17	16	18
期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期

（ 第 16 期
同期生からのことば ）

自称“ラグビーバカ”であることを誇りにしていた私ですが、やはり“ラグビーリコウ”には勝てない様です。 伊東梓

特に強い動機のないまま始めたラグビーだが、私には貴重な体験となった。自分のなかに結構な体力があることを知った。その分知力は不足かな？ 清水裕